



Title	認知言語学的アプローチによる多義語指導の実践と学習者の認知 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	三ツ木, 真実
Citation	北海道大学. 博士(国際広報メディア) 甲第13189号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70663
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Makoto_Mitsugi_abstract.pdf (論文内容の要旨)



[Instructions for use](#)

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（国際広報メディア） 氏名：三ツ木 真実

学位論文題名

認知言語学的アプローチによる多義語指導の実践と学習者の認知

本研究は、認知言語学における多義語研究の知見を英語の多義語学習およびその指導に取り入れてその有効性を実証的に検証すること、ならびに多義語学習の際の学習者の認知を調査することを目的としている。具体的には、前置詞の多義的な意味の学習を取り上げて、認知言語学の知見である多義語の中核的な意味概念（コア・ミーニング）を用いた指導法を開発するとともに実際にその指導を行い、効果を他の学習法との比較により検証した。また、その指導で得た知識を学習者がどのように適用したかについて質的に分析した。博士論文は6章と文献リストならびに付録で構成されている。以下、各章の内容を記述する。

第1章では、本論文の序論として研究の背景と目的を説明している。研究の背景としては、英語学習者が育むべき語彙力の一つとしての多義語知識の重要性と、英語教育における多義語指導への関心や必要性の高まりが説明されている。加えて、認知言語学における多義語研究の成果を語彙学習やその指導に用いる試みが研究分野として発展する一方、そこで得られる知見は拡散する傾向があり、一致した見解を得るには今後も研究の積み重ねが必要であると著者は述べている。さらに、これまで本研究と同様の研究分野においては学習者の認知を取り入れた研究が未発展であったと著者は主張する。これらを踏まえ、本研究の目的及び意義として、本研究と同様の分野における研究の有機的な蓄積や研究動向の方向性の集約に貢献すること、質的分析を通じて量的検証では見逃されていた新たな成果や課題を発見し、研究分野に新しい視点を提供すること、の2点をあげている。

第2章では、認知言語学の基本概念に触れるとともに認知言語学の領域で行われてきた多義語研究の動向を整理し、本研究で実施する指導の中心的ツールとなるコア・ミーニングについて説明している。また、多義語学習上の困難点を「英和辞典の使用」「言語間の差異」「意味的関連性の理解」「多義語学習プロセスで生じるバイアス」の4つの観点から議論し、コア・ミーニングの応用によりこれらの影響を低減して多義語の習得を促すことが理論上可能であると著者は主張する。加えて、コア・ミーニングを用いた多義語学習・指導へアプローチする方法として、「見なしの原理」を取り上げ、その説明を行っている。

第3章では、先行研究のレビューを通じて、本研究で検討すべき課題が整理されている。具体的には、コア・ミーニングを多義語の学習・指導に取り入れて効果を実証した研究を取り上げて概観するとともに、学習者の認知における先行研究の少なさについて著者は言及している。また、先行研究を概観し整理した結果、本研究で検討すべき課題を (a) 多義語学習プロセスで生じる問題の低減にアプローチする、(b) 学習者の意味処理を促す多義語指導法を考案して実施し、さらにその有効性の検証を行う、(c) 指導効果の有無を生じさせる具体的要因を明らかにする、とした。これらを踏まえ、本研究では2つの研究が実施されている。

第4章(研究1)では、日本人大学生の英語学習者を対象に多義語指導を実施し、その結果から、コア・ミーニングを応用した指導の有効性について報告している。具体的には、コア・ミーニングを用いた異なる2つの指導と辞書による指導の効果を比較している。その結果、以下のような知見を得たと著者は主張する。まず、「コア・ミーニングの網羅的意味としての概念」、「見なしの原理と意味的動機づけに基づく応用の方法」、「コア・ミーニングと拡張された意味との関連」の3点を明示した指導が効果的な学習を促すことが明らかとなった。また、用法ごとの分析から、特に抽象度の低い空間的用法において明示的な指導が有効であることもわかった。さらに、前置詞の既有知識ごとの分析から、知識の精緻化が促進されるという理由により既有知識の多い学習者に明示的指導が有効である可能性があることも示唆された。

第5章(研究2)では、研究1の量的な検証により有効性が見られた指導の内容を学習者がどのように応用しているかについて、認知パターンを把握する形式で調査を試みている。その結果、学習者は2つの対象物の具体的なイメージや、容器的空間及び時空間の空間的な見立てが容易である設問において、コア・ミーニングを適切に応用して、すなわち見なしの原理及び意味的動機づけによる解釈を適切に行って、解答を導き出しているとしている。一方でコア・ミーニングを適切に応用しなかった認知パターンの学習者は、特に抽象度の高い設問においてコア・ミーニングの適切な応用ができていなかったと分析する。これらのことから、見なしの原理及び意味的動機づけがコア・ミーニングに基づく多義語(特に前置詞)指導の有効性を生み出す条件の1つであるという仮説や、用例ごとの見立ての容易さが指導の有効性に影響を与えているという仮説を著者は導き出している。また、コア・ミーニングを適切に応用しなかった認知パターンから、コア・ミーニングを用いたことで生じる新たな学習上のバイアスが存在することも示唆している。

第6章では、本研究の総合考察として研究1と研究2の分析を通じて得られた新たな知見について言及している。研究1で特に「見なしの原理」を取り入れた指導が有効であったことに加え、研究2では正答率の高い設問で学習者が見なしを適切に働かせていたことから、コア・ミーニングを用いた多義語指導では、「見なしの原理」を取り入れた指導を行う必要があることを、著者は新たな知見として主張している。また、2つの対象物の見なし(コア・ミーニングを通じた投射)の容易さがコア・ミーニングに基づく前置詞の理解や習得に深く関連しているとし、その背景には対象物の抽象度が影響している可能性があるとし、さらに、分析

結果を踏まえて、コア・ミーニングを使用することで生じる新たな多義語学習上のバイアスについて説明し、「既有知識を優先するバイアス」、「不適切な解釈を成立させるバイアス」、「コア記述（日本語による説明）によるバイアス」が浮上したことを新たな発見として述べている。最後に、これらの結果を踏まえて、体系的な多義語の指導法を新たに構築する必要性や、認知言語学的知見のより良い応用の方法を議論するために、そうした応用に対する学習者の認識についても調査が必要となることを今後の課題としてあげている。